



怖い、 シーン

川崎ゆきお

「怖い怪談はありませんか」

「怪談はどれも怖いと思いますが、まあ、雰囲気だけの怖さもありますが、怖さにも色々があり、好みがあるようです。私が怖いと思っても、他の人はそれほどでもなかったり、また、私が何でもないと思って見ている、非常に怖いと感じる人もいます」

「何でもよろしいですから怖い怪談はありませんか」

「お話しとしては似たような話が多いですねえ。変わった例では状況が怖いとかがあります。これは幽霊もバケモノも異変も起こっていないのに、怖さを感じます。これはレベルが高い」

「もっと単純な話ではありませんか。すぐに怖さが出て来るような」

「はい、映像的なことで、驚くような怖さを感じるものがあります」

「映像ですか。じゃ、映画やドラマですね」

「そうです。そのシーンだけが怖かった」

「急に怖い絵が出るやつでしょ」

「そうです。その部類ですが、少し違います」

「幽霊は出ますか」

「出ます」

「じゃ、雰囲気じゃなく、露骨に登場するのですね」

「はい脅かそうと、出ます」

「じゃ、普通じゃありませんか」

「ところが、最初よく分からないのです」

「はあ」

「二人の姉妹が座敷で並んで座っています」

「はい」

「これは本当は三人姉妹で、一番上の姉は死んでいます。残った二人はそれを知りません。用事で旅に出たと思っています」

「はい」

「二人はその長女を殺した男と向かい合っています。だから座敷で二人の少女を、男が見ているようなカメラアングルです。そして、普通に会話をしています」

「その何処が怖いのですか」

「そのシーンがしばらく続きますが、男が怖がっています。しかも悲鳴を上げるほど」

「何か起こったのですか」

「既に長い間起こっていました」

「えっ」

「室内は薄暗く行燈だけです。しかし、ドラマなので、それほど暗くはありません。その二人の間に、もう一人座れるほどのスペースがあるのです。最初見たとき、二人の距離が少し開いているなとは思いましたが、気になるような距離ではありません。その二人の間には何もいません。何も座っていません」

「じゃ、どうして悲鳴を」

「二人の後ろです。その隙間の向こう側の家具の並んでいる箇所です。そこにモノクロの人物が座っていたのです」

「そんなの、最初から見えているじゃないですか」

「そうなんです。最初から出ていたのです。しかし、二人の後ろ側なので、やや小さい。それに二人はカラーですが、後ろの一人はモノクロです。だから家具かと思っていたのです。家具など注意して見ていませんからね。男がそれに気付いて、私も気付きました。最初から、そこにいるんですよ。しかし、男が驚いているときも、何を見て驚いているかが分かりませんでした。よく見ると、二人の間にもう一人、奥にいたのです。これは自分で発見したようなものです」

「それが怖かったのですか」

「最初から映像の中に入っていたのに、気付かなかった。だから、いきなり出たわけじゃない。ずっと出ていたのです」

「控えめな出方ですねえ」

「これが怖い。と言うより、その後、このドラマ、映像の隅々まで見るようになりましたよ。何か出ているんじゃないかと。しかし、それは一度だけでした」

「そのモノクロの人が、殺された長女の幽霊だったわけですね」

「そうです、顔がモノクロ以外、怖い顔をしていたとか、幽霊らしい仕草もありませんでした」

「はい」

「この怪談話より、そのシーンが怖かったのです。ゾクッとしました。後ろの黒い物が、幽霊だと気付いたときに」

「はい」

了